

のしりとまるときは、右の足をこまかに左の足をのべて、練めぐるなり。すべて太刀のさき、下重
ある櫻の木をすぐるほどに、ねりとまる。さだかならぬものなり。堂上にのぼりてはしの兀
子につく、座のうへの方にかへりみて、開門つかまつれと仰す、左右近の將曹、門にむかひて門を
ひらく、戸びらをたゝくなり、開門つかまつれと仰す、左近の將曹、門にむかひて門を
辨又仰せていはく、闇司座にまかりよれ、陣官又是をつたへて闇司を門下にす、む歸りまいり
て、おし座につきたる由申、内辨、舍人をめす、二聲笏をちらかくあて、大舍人いらへて少納言に告
しめす、少納言門より入りて、はしりて版につく、尺四位は三尺ばかり、内辨宣、まちきんだちめせ、
少納言稱唯してかへり出諸卿を次第にめすなり、外辨の公卿門の左のとびらより入て、南庭に立す、次第にへう
につく、第一の入ねるなり、異位重行大臣のうしろに大納言、そのうしろに三位中納言、其うしろに
中納言のすゑに宰相、二位中納言は大納言の末におめる、三位宰相はおめるなり、列さだまりてのち、内辨仰て云、しきゐん、群臣謝座いふ、次に造酒正軒廊よりす
すみて、外辨第一の人のまへにはしりよりて、ひざまづきて空盞を持てこれをさづく、第一の人
相跪て笏を置てこれをとる、造酒のかみ歸り入て、櫻の木のもとに至る程に、立て謝酒いふ、群
臣一同なり、謝酒をはりて、造酒正す、みよりて盃をかへし給りてかへり入、外辨の人々次第に
す、みて堂上にのぼる南のらんにそひて左の足を先にす、くだる時は北のらんにそひて右足
り、大臣、大納言はしにつく、親王中納言おくにつくべし、但又大中納言人數おほひを兩めんとりて、二ツな
がらをのく御ばんにすへて是をまかる、くだ物もとより御臺盤にあり、馬頭ばんはしかひお
なじくあり、臣下のだいばんにも、くだ物箸七兼てすへたり、晴の御膳四種以下八ばん供じぬれ